

母校だより (二)

自分の未来を 創る高校時代

松藤 千弥 (高29回)



文化講演会から
2013.12.17

私は今年四月、東京慈恵会医科大学の学長に就任したときから、何か川高の生徒のみなさんにお話ししたいと思ってきました。そこで、同じ高校で学んだ私の体験と、大学の立場でみなさんに望むこと、高校時代にこんなことをやっておいた方がいかな、ということをお話ししたいと思います。

私ははじめ、臨床医になろうと思っていましたが、二年間内科の研修医をした後、大学院で研究生活をしたところ、研究の方が自分にはあっているということに気づいて、それ以来、基礎医学の教室で研究を続けてきました。そして分子生物学講座の教授になった頃から、ずっと入学試験に関わってきました。私たち慈恵医大が入学者に求めるものとして特に重視しているのは、動機、自律性、想像力、この三つです。おそらく、これはほかの医学部、大学でもみなさんに求めることだと思います。

■大学で学び続けるための動機

一つめの動機というのは、何のためにその大学に入るか、ということだと思います。たとえば医者になりたいというのでも、校風にあこがれて、また、どんな大学、どんな学問分野だかわからないけれど行ってみよう、ということでも私はいいと思います。しかし、周りが勧めるから、就職に困らないみたいだから、また単なる大学のブランドや、自分の成績がいいから入試難易度の高いところを目指そう、という考えで大学を選ぶと大学入学後、学習が長続きしません。とはいえ、動機は今の時点ではかっちり決めておくことはないと思います。私も先ほど述べましたように、医者から基礎医学者の方針転換しました。要は、大学に入って学び続けられる、あるいは就職して仕事を続けられるような動機であればいいと思います。

■自律的に勉強する

二番目の自律性は、いわれなくでも自分で勉強する、ということだと思います。大学では高校と違って、まず課題を自分で見つけ、その課題を解決するための知識を自分でさがしてそれを身につけます。同じように自分でやるといっても、中身が違いますから、大学に入ると勉強のやり方を転換する必要がありますが、今の高校生の段階では、授業で教わったことをいわずに、自分で勉強するということがいいと思います。この自律性と関係して、

過度に楽観的であることはよくありません。このことについてはあっても触れますが、前向きであつても楽観的すぎないというの、自律して勉強するには大事なポイントだと思います。

■相手の立場に立つて想像する

三つめの想像力は、コミュニケーション能力の最も大切な要素です。人がどう考えているか、自分の言葉が他人にどう伝わるかということが想像できる力です。これがないとコミュニケーションが成り立ちません。この想像力というのは相手の立場に立つわけですから、自分の枠の中で生きているだけではなかなか身につきません。様々な経験を通じてほかの人とふれあう、また場合によっては読書や映画を通して人間の幅を広げる、そうしてはじめて身につけてきます。コミュニケーションではスキルも大切なのですが、スキルだけではコミュニケーションはできません。この想像力に基づくコミュニケーションというの、リーダーシップをとるうえでも欠くことができませんし、また、医療系の仕事に就くためにも想像力に基づくコミュニケーション、つまり思いやりは非常に大切です。この想像力を養うには、やはり、体験、読書、映画といったものが必要です。で、高校時代、勉強ばかりでなく是非これらを育てていただきたいと思っています。

■効率的な学習態度は大学の学習では障害になる

そのほかに大切なものが学力です。わたくしがいる医学部では入学選抜で、学力についてはバランスを重視します。医学、医療のような総合的な学問では、バランスのとれた学力というのが意外に大切です。また、難関大学に入るための効率的な学習態度と受験技術は、大学で学習を進めるうえで大きな障害になります。

医学部には大変優秀な成績で受験を突破してきたのに、学習ができないという人が常に一定の割合でいます。それは一つには、受験時の効率的な学習態度から脱却できない人です。そういう人は大学で必要な、積み重ねによって専門的な知識を得るための学習スタイルへ転換できず、脱落します。二つめは動機に問題がある人。それから三つめは過度に楽観的な人です。自分は何とかなると楽観的に考えすぎて課外活動を熱心に行った結果、勉強時間が足りなくなつて落第してしまうという人が結構います。こうした過度に楽観的な態度は、医療の現場でも、患者さんを非常に危険な目にさらすことにつながります。ですから、前向きだけれども、余り楽観的になりすぎないことが大切です。

■大学の特色を理解する

もうひとつ、最後に、大学としては自分たちの大学の特色に共感してくれる入学者を求めようとしています。私立の大学だけでなく、国公立大学も、今、

それぞれ特徴を持った教育をしようというところで競い合っていますから、受験しようとする大学がどんなことを考えて、どんな大学を目指しているかということをしつかり理解して受験する、ということが大事だと思います。

■高校時代の挫折は貴重な体験

私は高校時代、バレー部に初心者で入部しました。監督は非常に厳しい指導で知られる萩原秀夫先生でした。一年の秋に腰を落としてレシーブする姿勢を保てず、挫折を覚えて退部しようと思った先生に話しに行ったのですが、先生から、それは筋肉が足りないからだ、時が解決するといわれ、結局、やめずに三年生の秋の国体まで続け、全国大会にも二回出場しました。萩原先生は私の人生の師です。

また、二年生の時、数学で挫折を経験しました。それまで、勉強がわからないことがなかったのですが、わからないということがわからなかった。それを担任の石井正雄先生が気づいて早めにわからせてくれたおかげで、バレー部を続けながら現役で医学部に進学できました。

挫折というものは経験してみないとわかりません。これまで医学部で学生指導をしてきましたが、大学に入つてはじめて挫折した者の指導はとて大変です。高校時代に挫折しておくと、貴重な体験で、挫折してもそれを前向きにとらえていくことが大切だと思います。